



避難先で飼育されている繁殖牛(相馬市)

村が計画的避難区域に指定されて2年。この長い避難生活の中で、農業を避難先で再開している方々があります。

村では、避難の最中であっても営農意欲が強い方を対象に、営農再開支援を実施しました。これは、これまで村で培ってきた営農技術を継続・継承するとともに、営農者の生活再建を図り、飯館村の農業「までいブランド」の復興を目指す取り組みです。今回は、これらの支援策を活用し、営農を再開された営農者にお話をうかがいました。

これまで、農業が基幹産業だった飯館村。避難によって、村内での営農は行えなくなっています。しかし、村の復興のためには、トルコギキョウや飯館牛など村で培ってきた「までいブランド」を再生することが欠かせません。

村の復興計画の基本施策の一つ「までいブランドを再生するには、村で培ってきた花きや野菜などの園芸作物や畜産についての技術を継続・継承する取り組みを守り、また、新たな産業を積極的に導入することで、活気ある飯館村に再生することを目指しています。

しかし、避難しながらの農業再開は簡単なことではありません。農地の確保や新たな施設・資材の導入、その土地に合った栽培(飼育)方法や販売ルートなど、乗り越えなければならぬハードルがたくさん存在します。

そういった中で、村は避難先で農家の方々が確保した営農再開場所に必要な、パイプハ

ウスや農業機械を農家に代わって整備し、貸し付ける営農再開支援事業を行いました。この事業は、東日本大震災復興交付金を活用した「被災地域農業復興総合支援事業」で、これまで13人の方が避難先で営農を再開しています。

今回は、そのうちの6人の方に農業再開についてのお話をうかがいました。



福島市荒井地内に設置されたパイプハウス

周りの皆さんとの関わりを大事にしています

鳴原 昭二さん(長泥)

田村市常葉町に避難し、平成23年6月から和牛繁殖を再開した鳴原さん。最初の年は牛の飼育だけでしたが、翌年から地域の方から水稻の栽培も任せられ、今年はおよそ2ヘクタールの水田で水稻作付けを行う予定とのことです。また、和牛の飼料として、牧草やライ麦などの栽培も行うた

め、今回、水稻育苗用のパイプハウスと牧草収穫等のためのトクタクターなどを村で導入しました。現在、避難先から繁殖牛の出荷を行っている鳴原さん。「自分は避難先で農業を行っているが、地元の人たちと関わっていくことが大事だと思っています。自分だけの経営と思わず、地域の皆さんと共存・共栄していきたい」と、避難先の地域の方と積極的に関わり、そこでの繋がりを守った農業を目指しています。

また、「ゆくゆくは村に戻りたい」という思いがあります。でも、長泥地区は他の行政区より帰村が遅くなるので、村の仲間が村で畜産を始める時に自分の牛を買ってもらえるよう良い牛を出荷していきたいですね」と笑顔で話していました。

一日でも早く地元で活躍したいです

佐藤 一郎さん(大倉)

相馬市の仮設住宅に避難する佐藤さん。10キロほど離れた場所に牛舎を借りて、平成23年8月から和牛繁殖を続けています。当初、10頭から飼育を始めた牛も、現在では28頭に増えています。牛舎がある場所は、相馬市と南相馬市の境の静かな場所にあるため、「周りを気にしないで飼育できる」と話しています。

今年から、「地元の生産組合に入つて、6ヘクタール耕作することになりました」と、相馬市で牧草を栽培することになった佐藤さん。そのために、復興交付金事業でのトラクター導入を要望しました。昨年までは、買いエサと近くの稲作農家から買い入れた稲わらを飼料に使っていたと言います。

「今年は、自分でトラクターを使って収穫などができるので、楽になります」と話す佐藤さん。ま



村に早く戻りたいと話す佐藤さん

た、佐藤さんは、もう一度村で牛を飼いたいと話します。「早く村に戻って、地元で活躍したいです。ここでやっているのは、村で牛が飼えるようになるまでの繋ぎです。村で営農できるようにしたら、また牛を飼いたいですね」と、帰村しての営農再開に向けて経営を続けています。



一頭一頭丁寧にエサを与える鳴原さん